葛　城

被爆体験記

庄原市山内地区原爆被害者の会

葛　城

かつらぎ

被爆体験記

庄原市山内地区原爆被害者の会

広島　原爆を投下した３機の米軍機のうち１機が爆心地から約 80 キロ離れた高度約 9000m の地点から撮影（1945 年８月６日）

爆心地から見る産業奨励館（原爆ドーム）

昭和 33 年（1958 年）３月に建立され、毎年８月６日に慰霊碑前で行われる慰霊祭

▲旧国鉄　山内駅

▲山内西尋常高等小学校
（左側の建物が旧広島陸軍病院庄原分院山内病棟となった）

目次

被爆体験記記録集発刊にあたって……庄原市長　八谷　泰央　1
発刊にあたって……会長　加藤　照明　3
山内の被爆体験を継承しよう……編集委員会　5
山内における被爆者収用状況……10
戦争に奪われた私の青春……高茂町　谷口　文江　19
私の被爆から、帰郷まで……尾引町　曽根　福美　22
私の被爆体験記……殿垣内　曽根　文子　25
原爆体験記……本郷町　加藤　照明　27
私の被爆について……山内町　土井　昭二　31
学徒動員……平和町　車田　和江　34
被爆体験記……殿垣内　片岡　美智　36
私の被爆体験記……高茂町　大下アサコ　40
忘れ得ぬ思い出―被爆兵士を運んで―……木戸町　山本　智洋　44
「はぐるま座」講演の感想……47

表紙　葛城について

山本　智洋

山内小学校の裏には、中世の山城があった葛城（かつらぎ）山があります。この山城は葛城刑部永義の居城であったと芸藩通史には記されています。山内には中世の山城で有名な甲山城がありますが、この葛城は甲山城の出城であったといわれています。

この山には戦時中、山内西国民学校の児童が竹槍を担いで行軍した思い出があります。今も城跡としての石垣や井戸も残ってはいますが、山の手入れをしなくなった現在は登ることは不可能な山になっています。

広島陸軍病院庄原分院山内病棟で死亡された88柱の方々は、この葛城山の麓で火葬に付されたのです。

8月中旬から9月下旬までの約1ヶ月、毎日のように何人かの死体が焼かれました。小学校付近は死体を焼く煙と異様な臭気がただよっていたと当時のことを今も高齢者は語っています。この火葬跡地に、地域の方々の努力で昭和33年に原爆犠牲者慰霊碑が建立されました。それ以後、原爆が投下された八月六日には、ご遺族や地域の方々、小学校の児童などがお参りして原爆慰霊法要が行われています。本年からは、平成13年に結成された山内地区原爆被害者の会員もお参りすることにしています。この慰霊祭をとうして、核兵器廃絶の決意を新たにしなくてはならないものと思います。

そして、核兵器のない平和な世界の実現に向けて、今こそ全国民が立ち上がらなくてはならないと思います。

このように、原爆被害者と深いかかわりのある「葛城」を表紙の題名としました。

写真　副編集長　土井　昭二
題字　会　　長　加藤　照明

被爆体験記記録集発刊にあたって

庄原市長　八　谷　泰　央

昨年十一月、被爆体験記発行や体験の継承活動、山内地区慰霊祭への協力などの諸活動を目的に山内地区原爆被害者の会を結成され、会の発足にあたり当時の献身的な救護の貴重な活動等を収録した記念誌が発刊されますことは、まことに有意義であり、ご同慶にたえません。

昭和二十年八月六日、広島市に投下された原子爆弾は、一瞬にして数十万人の命を奪い去り、生き残った被爆者も様々な後障害により、いまなお肉体的にも精神的にも苦しみ続けております。

被爆者に対する国の本格的な援護が始まったのは、昭和三十二年に「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」が制定され、その後、被爆者援護法は次第に拡充され、平成六年十二月には、「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」が制定されました。この法律により、国の責任において被爆者に対する保健、医療及び福祉にわたる総合的な援護対策が講じられているところです。

原爆投下時、山内地区では、旧広島陸軍病院の分院として庄原病院が指定され、現山内小学校に急設された病棟で多くの軍関係被爆者が治療を受けられました。その際、地域住民の方は被爆者の遺体処理や負傷者の手当・看護に従事され、二次被爆者となられました。

今日、被爆者の平均年齢は七十歳を超え、高齢化が一段と進み、ひとり暮らしや寝たきり等の介

護者が年々増加するなどの環境の変化を生じております。今後も、被爆者援護の理解を深め、援護行政が一層の充実、さらには核兵器廃絶と世界恒久平和の確立を願うものであります。

この記念誌が、貴重な被爆体験記として後世に引き継がれ、人類平和のための情報資料として有効に活用されることを期待し、会の益々のご発展を祈念して発刊に寄せてのご挨拶といたします。

発刊にあたって

会長　加藤照明

今を去る五十七年前、即ち昭和二十年八月六日、広島市に投下された一発の原子爆弾により、一瞬にして八月十日現在の当時の広島市の市民被害調査によりますと、広島市市民三十五万人前後、死亡者十四万人前後の尊い命を奪い、三日三晩炎々と黒い雨を伴って火の海と化しました。

生き残った被爆者は夫々、地方の収容所に移動させられ、又故郷に帰って手厚い看護をうけられたのであります。

原爆投下時、山内地区では旧山内西国民学校に、広島陸軍病院庄原分院山内病棟が開設され、被爆によって負傷された兵士二七四名の方が、芸備線で運ばれて来られ、地域住民は毛布や食糧を持込んで日夜看護に当り、又被爆者の遺体処理や、負傷者の手当をされた為、間接被爆者となられました。病棟では八十八名の方が、永遠の別れを告げられた為、地域に建立された慰霊碑で、毎年八月六日に遺族を招待して山内地区慰霊祭が行われています。

今日では、被爆者の平均年齢は七十歳を超え、高齢化が一段と進み、様々な後障害により、肉体的にも精神的にも苦しみを続けておられます。

今後も被爆者援護の充実と共に、永遠に核兵器の廃絶と、世界恒久平和を心の底から願いたいと

思います。

此の被爆体験記記録を教材として市内の小学校、中学校に配布し原爆の恐しさや平和の大切さを、子々孫々まで伝えて行きたいと思います。

発刊に当たりまして八谷市長様から有難いお言葉を頂戴し、更に地域の皆様方から尊い体験のご投稿並びに関係資料のご提供を賜り、衷心より御礼申し上げます。

終りになりましたが、編集委員の方々には、日夜編集会議や、資料収集にご協力下さいましたお陰で、ここに「葛城」が完成をいたしました。改めて有難く感謝申し上げます。

山内の被爆体験を継承しよう。

編集委員会

今年で四十五回目を迎える原爆犠牲者追悼慰霊祭の準備が山内西地区社会福祉協議会で始まりました。

記録によると、昭和二十年（一九四五年）八月六日、広島に原子爆弾が投下されてから三日後の八月九日、広島第一陸軍病院から、「本日午後三時頃臨時列車で被爆者患者をそちらに輸送するから受け入れ準備をととのえて置く」という緊急指令が当時の山内西村長宛てに届きました。

この緊急指令を受け取った村役場は、緊急に村議会を召集して対策を検討しました。そして、山内国民学校の校舎の一部を病院施設として充当することを決定し、ただちに当時の国防婦人会、大政翼賛会青壮年団等に協力を要請して受け入れ体制を整え、被爆者の到着を待ちました。

八月九日、長崎に原子爆弾が投下された日の午後六時過ぎ、被爆者を満載した臨時列車が山内駅に到着。下車した被爆者の総数は二七四名にものぼりました。

これらの被爆者の方々は、広島市内で被爆後、徒歩で避難し芸備線沿いの戸坂小学校に収容されていた人たちでした。

病状の悪化や広島近隣の学校施設等に収容しきれない人数になり、陸軍病院の判断で芸備線で県

北部に輸送されたのです。

山内駅に到着した被爆者は、いずれも疲労困憊、自力で歩くことも困難な状態であったので、山内駅から小学校まで馬車三台と急造された担架でほとんどの患者が輸送されました。その時、山内駅頭や小学校までの輸送途中で死亡された方が六名。その内四名の方は氏名も確認することができず、無縁仏になられてしまいました。

一瞬にして無差別に十数万人の命が奪われ、数万人の被害者が発生。同時に家屋をはじめ生活資材が完全に焼却あるいは破壊されるという未曾有鵜の大災害が広島でおこり、その被害者が県北の農村、山内地区に輸送され治療と救護、看護が指示されたのです。

当時の山内地区国防婦人会の人たちは、軍や自治体の指示であったとはいえ、炊事、洗濯、寝具の調達、看護。なくなった方の火葬。それこそ、昼夜の別なく献身的な奉仕活動を毎日繰り返され、肉親にもおとらぬ排便の始末から傷の手当て。夏の蒸しかえるような暑さのなかでの蛆虫対策。食糧の手配など看護婦さんとまさに一体となった懸命な、涙ぐましい看護を続けられました。

毎日、五人、八人と無念の最後を遂げられた方々は、消防団員の担架で小学校裏の葛城山麓の臨時火葬場で荼毘に付かれました。八十八柱にのぼりました。

治療を受けながらも、重傷患者は幻覚症状にとらわれ、肉親の名を急に大声で呼び続けたり、突然立ち上がり、周囲の患者を踏みつけたりという状況が昼も夜も続きました。

広島陸軍病院庄原分院山内病棟は、開設後、五十三日目の九月三十日に閉鎖されました。

あまりにも痛ましい悲惨な被爆者の最期に直接接し、献身的な看護に全力をあげられました山内地区の婦人会の皆さんは、地域の区民の協力も仰いで、翌年からお盆には毎年欠かすことなく被爆者の終焉の地を清掃、香華をたむけ、当時の薬師寺住職、馬場清範導師のご奉仕により慰霊の行事をささやかながら続けられました。

そして、十三年後の昭和三十三年（一九五八年）三月、婦人会の皆さんが中心になって、区民と協議し、山内西地区全戸にも呼びかけ寄付を仰ぎ、庄原市からも補助金をいただいて原爆犠牲者の慰霊碑を建立されました。この慰霊碑前では、山内地区の住民の総意で毎年八月六日原爆投下の日に、山内地区社会福祉協議会の主催で慰霊の行事が開催されています。

今年で四十五回目の慰霊祭になり、遺族の方々や地域の被爆者、小学校の児童生徒さんも参加されています。

慰霊行事の動機は、将来、このような悲惨な過ちを二度と再び繰り返さないことを祈念し、世界の恒久平和を願うものでした。

山内地区原爆被害者の会は、この体験記を発行する動機のなかで、原子爆弾による被害のすさまじい実態、実相をしっかり次の世代に継承しなければならないという責任感と同時に、都市の大災害を支えた農村の力ということに注目しました。

五十三日間の山内病棟で二百七十四名もの被爆者を、献身的に看護治療し、やむなく八十八名の

不幸な死にも立ち会うことになったとはいえ、多くの患者をそれぞれの故郷に送り帰すことに尽力されたことは、当時の政治環境下の拒否することができなかった「命令」を受けての動員的対応をはるかに越え、まさに、山内地区の農村集落全体の総合力であったと思います。すさまじい被害者の現実の前に、学校近隣の農家からは、高価な客人用寝具が惜し気もなく提供され、手作りの扇風機も搬入されました。

このように当時の体験を多くの区民のかたから聞く中で、ヒロシマを支えたもうひとつのヒロシマが見えてきます。今年は被爆五十七周年を迎えます。多くの被爆体験記が発行され、二度と戦争のない平和な世界を創造するための努力が継続されています。

現在、若い世代の山内地区住民として考えたとき、目まぐるしく変化する政治経済の中で、ともすると私たち自身の故里の歴史を疎んじている、軽視しているのではないとの想いを持ちます。

山内地区には、この地域の社会を支え発展させてきた多くの先人の努力があり、その上に現在の私たちの生活があります。

山内地区内のご家庭を訪問して、戦争世代の高齢者のお話を伺うと、当然にもすべての方々に悲惨ともいえる戦争体験があり、敗戦後の生活のさまざまな苦悩苦労と建設への努力の経過に接することができます。

広島の原爆で被爆された被害者がどのように山内に輸送されたのか、そして、山内でどのような治療看護を受けられたのか、健康を回復された方々はその後の人生をどのように生きられたのか。

この体験記は、爆心地での被爆体験と、未曾有鵜の災害を支えた農村の力に視点を定めて編集しました。小学生にも容易に理解できる表現で、という当初計画はなかなか困難でしたが、この被爆体験集を初号としてより詳細に山内地区の被爆体験を記録し継承する決意も話し合っています。

山内における被爆者収容状況

―付・原爆犠牲者の碑―

昭和二十年八月六日、広島に原爆が投下されてから三日後の八月九日、広島陸軍病院より「本日午後三時頃の列車で被爆患者を輸送するので、その受け入れ準備を完了しておくように。」との至急連絡が、当時の山内西村役場にありました。そこで、さっそく役場が中心となり、山内西国民学校を病棟にし、山内地区の国防婦人会、大政翼賛会、翼賛壮年団の協力によって受け入れ体制が整えられ、午後三時を待ちました。しかし列車の都合が悪く、午後六時頃、患者を乗せた列車は到着しました。山内駅頭に下車された患者総数は二七〇名でした。これらの方々は徒歩で八月六日に広島を発ち、戸坂小学校校庭まで避難されていた人達で、疲労とともに病状もよくないので、山内西国民学校まで、馬車三台と多数の戸板で運搬しました。その時、山内駅頭で、あるいは運搬途中なくなられた方々が六柱もありました。これらの方々は結局、氏名も本籍も確認できないまま、無縁仏となられたのです。後になって、広島の原爆犠牲者慰霊碑に合葬されたのです。山内西国民学校の臨時病院は、現在山内小プールの設けられている位置にありました。二階建て校舎で、階下に裁縫室、礼法室を含め三教室、その他炊事場がありました。二階には三教室がありました。この臨時病院は、広島陸軍病院庄原分院山内病棟と呼ばれ、責任者は今はなくなられている藤高軍医大尉（戦

後、尾引町に開業されていた）でした。この病棟（このほかに庄原病棟あり）の患者や炊事の任にあたられたのは、山内西各地域に割り当て動員された国防婦人会員の方々でした。病棟内な悪臭がただよい、その上、動けない患者も多く、便の始末、傷の手当て、食事の心配等々、大変なご苦労でした。病棟の寝具は、民家から徴用した枕、敷布団だけでした。夏であるからあまり寝具はいらないというので、毛布までは徴用されませんでした。当時はどこの家庭でも毛布などの少ない時でもありました。

被爆患者の大多数は軍人・軍属の方々でした。それらは、まるで地獄絵図に描かれたもののようで、まったくひどいものでした。男より女の方の姿がひどいものでした。頭髪は抜けるので、長く乱したままで、顔は水ぶくれになり、衣服はやぶれ、まともにみられないものでした。両腕の肘から手の甲にかけて皮膚がむけ、そのうえ汁までも出るので、胸の前まで腕をあげ手首をだらりとたらした姿は、まるで幽霊のようでした。

次第に患者の氏名・家族の住所もわかり、肉親への連絡もできました。さっそく見舞いに来られる家族があったが、近くに旅館もないので、民家に頼んで宿泊、看病されました。物資の不足と不意のことゆえ、近所の民家の方々のご苦労も大変であったでしょう。

当時、山内西村役場に勤務されていた植松暢夫氏は、次のように語られました。

「島根県から息子をたずねて来られました。少し前になくなられたことを告げると、役場の土間にすわりこまれました。そして、息子に会わせてくれと頼まれました。ちょうど火葬をしていたの

で、そのことを話すと、火葬場へ行って骨を拾わせてくれるようにと言われましたが、それをとめるのに困りました。というのは、火葬場は臨時のもので、薪を井の字に組んで、その上に幾つもの死体をならべ、イワシを焼くようにして火葬していたので、その場面を家族に見せると残念がられるだろうと考えたからです。その時来られた老人の愁歎されたようすが思い出されます。」

被爆者は日に二、三人、多い日では八人も死亡され、前期の六柱と会せて八十八柱の方々がここでなくなられました。そのうち、チフスで死亡された方二人を含む。（七十人ぐらいチフス患者あり。隔離病舎で手当て。）

この病院が閉塞したのは、その年の九月下旬でした。山内の婦人会および有志は、死体の措置跡で毎年八月六日には木戸町・藤岡源三郎様外八十七柱の御霊の冥福を祈り続けてこられました。そのうちに、その場所を後世に残し、原水爆禁止の決意を表わし、なき英霊の冥福を祈るために、建碑しようという声が出ました。賛否両論ありましたが、結局建碑と決し、山内公民館長・長島琢夫氏等の労により、発起人、日向・大歳地域婦人会、後援、山内西地区婦人会ということで寄付金を集め、昭和三十三年三月に山内町葛城山麓の八十八柱措置跡に建碑されたのです。その建碑を記念して、森滝一郎氏（広大教授）を招へいし、「原水爆のおそろしさ」をテーマに講演してもらいました。それからも毎年、山内地区社会福祉協議会をはじめ各種団体の呼びかけにより、小学校児童や各種団体の代表多数参加のもとに、法要が行なわれています。

戦没者芳名録　於広島第一陸軍病院、庄原分院・山内西病棟

階級	氏名
故陸軍一等兵	西村正一
故陸軍一等兵	神在義香
故陸軍軍曹	齊良正寛
故陸軍上等兵	和多田武
故陸軍上等兵	平岡卜夫
故陸軍一等兵	藤井唯行
故陸軍上等兵	勝原久馬
故陸軍上等兵	安富勝
故陸軍一等兵	中空新二郎
故陸軍伍長	橋坂貞美
故陸軍兵長	木谷源二郎
故陸軍一等兵	原三郎
故陸軍兵長	金延時男
故陸軍一等兵	北川義重

故陸軍伍長　荒木静夫
故陸軍衛生上等兵　占米清
故陸軍兵長　仲本春美
故陸軍上等兵　竹内一夫
故陸軍上等兵　尾崎春芳
故陸軍一等兵　寺坂覺藏
故陸軍一等兵　門英雄
故陸軍軍曹　槇野信雄
故陸軍上等兵　青木敬市
故陸軍一等兵　小川茂樹
故陸軍一等兵　島津克己
故陸軍兵長　田津兵一
故陸軍一等兵　金澤宣
故陸軍一等兵　遅越敦
故陸軍一等兵　田中等
故陸軍一等兵　阿賀昴
故陸軍軍属　沖中利馬

故陸軍上等兵　山森光明
故陸軍一等兵　宇都宮壽一
故陸軍伍長　竹田達三
故陸軍一等兵　松井虎夫
故陸軍兵長　徳永忠
故陸軍一等兵　湯浅正之
故陸軍一等兵　吉岡輝久
故陸軍兵長　波多野秀男
故陸軍上等兵　北本實
故陸軍一等兵　平松精一
故陸軍上等兵　小野勲
故陸軍上等兵　岩根資郎
故陸軍兵長　坂本由次郎
故陸軍軍曹　鉄谷博
故陸軍一等兵　田野俊雄
故陸軍一等兵　山崎二郎
故陸軍上等兵　萩原喜一

故陸軍一等兵　伊藤瀧人
故陸軍上等兵　中本辰夫
故陸軍医予備員　友野清
故陸軍上等兵　畠原文夫
故陸軍衛生一等兵　高橋齊
故陸軍一等兵　三口信司
故陸軍一等兵　貝原誠
故陸軍軍曹　味呑一夫
故陸軍衛生兵長　奥谷春雄
故陸軍衛生一等兵　山本保雄
故陸軍兵長　新宅敬三
故陸軍衛生一等兵　矢野下敏治
故陸軍上等兵　脇坂利春
故陸軍衛生一等兵　枝廣順三
故陸軍衛生一等兵　本田勇
故陸軍准尉　井上八郎
故陸軍伍長　平田功

故陸軍一等兵　藤岡源三
故陸軍軍属　楠橋節夫
故陸軍上等兵　門藤達雄
故陸軍兵長　金山繁秋
故陸軍一等兵　安次勝敏
故陸軍衛生一等兵　関井當
故陸軍少尉　荒木俊郎
故陸軍少尉　樫田啓一
故陸軍軍曹　奥斜春之助
故陸軍兵長　藤井増太郎
故陸軍一等兵　佐藤七郎
故陸軍少尉　高岡良
故陸軍看護婦　竹本小雪
故陸軍看護婦　国重定子
故陸軍軍属　久保方子
故陸軍看護婦　林宮子
故陸軍看護婦　森岡輝子

故陸軍軍　属　川野俊子
故陸軍軍　属　加藤スミヱ

戦争に奪われた私の青春

高茂町　谷口文江

昔の尋常高等小学校を卒業しその年に広島へ出ました。個人病院で働きながら独学で看護婦の免許を収得しました。

だんだんと戦争が激しくなり遂に昭和十六年十二月八日太平洋戦争が勃発し、日毎に外地の戦争も激しくなり、人馬とも戦地へと、狩り出される様になり、宇品港より外地戦場へと送り出す毎日でした。内地では食糧も不足し日本全国民の生活は苦しくなり、私も陸軍病院の看護婦になり、広島第一陸軍病院（今の市民球場）に勤務して、以来宇品港より戦場へと送り出した兵隊さんが負傷して、次々と内地へ送られて帰ってこられ、兵隊さんの看護に毎日が走り廻る有様でした。これも日本が勝つためと、一生懸命で看護に昼夜専念致しました。戦場で敵機にやられ、平足をなくした兵隊さん、両手足のない人は、瓶（昔の水瓶）に入れられ護送されて帰った時は、看護婦とはいえ、涙が出ました。そのうち内地でも、度々敵機が襲来し、防空壕へ患者と非難の毎日でした。内地も、夜昼の別なく襲来の戦場でした。ある時宇品周辺に敵機（艦載機が数十機やって来て、空襲で多くの、大人、子供が負傷し運ばれた時は、もう大変でした。

特に広島は軍都で、また呉には、海軍基地もあり、激しくなるばかりで、陸軍病院も広島郊外に

疎開をするよう命令あり、私達は庄原病院（今の日赤病院）へ軽症患者だけ数十名だったと思います、連れて疎開しました。ますます戦争は激しくなり遂に、昭和二十年八月六日あの恐ろしい。兵器原子爆弾が投下され、広島は一瞬のうちに灰となり多くの人々が被爆し亡くなりました。私たちはただちにチームを組んで庄原より戸坂の学校へ救援にかけつけました。戸坂の駅に着くと、もう異様な悪臭で、何とも云えない、ありさまでした。それから、戸坂で二日か三日救護に専念し、山ノ内小学校が病院に変り、私も山ノ内病院で被爆患者の治療に一生懸命昼夜なく、看護につとめましたが、その甲斐なく、なくなっていかれ、残念な思いを何度となく味わいました。私も姉妹の二人を原爆で亡くし、今だ五十数年過ますが、これが姉の物これが妹の物は何一ツ出ていません。私の父が投下後毎日の様に広島へさがしに行きましたが、それから数年後父も亡なりました。その時の両親の悔む様子が五十数年経った今も私の心に深く残っています。私が元気で居る限り八月六日を忘れずに広島へ参りたいと思っています。

山ノ内病院での被爆患者の治療に昼夜を一生懸命専念致しましたが、多くの方が次々と死亡され、遠方へ（故郷）遺骨となって帰っていかれ残念と淋しさが、胸を熱くした思いは一生忘れる事はないでしょう。原爆と云う恐ろしい兵器で、人々は生きる希望も失い、当時は食糧もだんだん不足し草の根、木の芽を食べ生活していましたが、その内栄養失調や、伝染病も蔓延し、医薬品も、底をつく始末で、なすすべもない状態でしたが、遂に八月十五日終戦となりましたが、広島はまだまだ戦争がつづいて、原爆症で苦しむ人が多く、今も原爆症で亡くなられる方が多く、特に高齢者の方々

が亡なり、原爆体験も少くなりました。私の人生は戦争の恐ろしさと、苦しさが、七十有余年経っても忘れることはありません。現代では遠い悪夢であったかの様に平和です。次の世代に二度とこんな思いを、経験させてはなりません。

当地（旧山ノ内）高茂に縁あって嫁ぎ、義父母をみとり再出発で看護婦の道をと、庄原日赤病院に二十数年勤務し現在は退職し主人と二人暮の日々を送っています。

私の被爆から帰郷まで

尾引町　曽　根　福　美

私は昭和十九年四月、広島市吉島本町、倉敷航空機飛行機部品を作る軍需工場に入社、二ケ月間徹底した軍国主義下で、二〇〇名が教育を受けました。六月にそれぞれの職場に配属され、日本の勝利を信じて日夜三交代で生産していました。私は電気部で五名が配属になり、二階の職場は電気の発電板があり、後に大きなトランスが数個並んでウーンと鳴る音がし、電気の恐ろしさを覚え私に出来るかと心配しました。職場の人は係長と三十五才以上の方が六人で県工の夜学生が一名と、女子事務員一名と、私達はその七名の方と実技を一緒に一年間習いました。私共の職場は夜勤は二名で、交替で仕事をしました。二年目からは、先輩と一緒に一人づつで一週間交代になりました。

昭和二十年八月六日朝、警戒警報発令となり、暫くして解除され、まもなく、午前八時十五分よく晴れた青空だったと思います。私はその朝二名で工場の電気の故障の為、四メートルの高さの屋根に登り、同僚は屋根から電柱に登り、私は屋根から、下の事務員さんと連絡を取っていました。その時電気がショートした様な光と、強烈な大音響で一瞬何も見えなくなり、何が起こったのか見当のつかない状態となり、同僚と一緒にいたこともわからずただ茫然としていました。突然後方に負傷した同僚の姿を見つけ、その後自分も上半身に真赤に火傷していたことがわかったのです。黒

い煙が入道雲のように見え、広島の市内は一瞬にして建物がこわれ工場の屋根は吹き飛び、各地に火が燃えあがり、焼野原になり、どんな爆弾だろうと思いました。同僚と共に助け合って医務所に行きました。負傷者が一杯で白い薬を塗ってもらい男女の区別のつかない人があふれていました。私達は工場勤務の負傷者なので早く治療していただき皆と同じように白い薬をつけ、吉島飛行場の近くの独身寮に帰ってみると怪我人や避難した人で一杯でした。私が防空壕に入って見ると大怪我、血まみれの人が〝助けて！〟〝水を飲ませて〟叫び声で、でも自分の身体だけでどうする事も出来ない状態でした。市内は暗闇の中に夕焼空を思わせる様に赤く燃え続けていました。私は防空壕の中に二日間いました。七日夜、木戸町の垣さんが元気な姿で来られ、此処にいても、どうする事も出来ないから庄原へ帰りましょう八日に庄原に帰ろうと思う一緒に帰りましょう。朝六時出発広島駅から線路伝いに矢賀へそして戸坂を経て矢口駅迄徒歩で何とか元気を出して帰りましょうとの事。私も帰る事にして朝六時着の着のままで歩きました。南大橋を渡る時は橋に負傷者が一杯寝ていて通るのがむつかしいし。川端では沢山の死体が並べられ住所氏名がわかると瓦に名前を書いてつけてありました。焼けた電車の中では避災者が寝て、馬の死体は大きくふくらみ臭い匂いが漂い、地獄とはこんな光景を云うのだろうかと思いながら歩き、七時半頃八丁堀に着きました。その時運よく警察官を見つけられた垣さんが被災者の証明書をお願いしたら、その警察官は山内から来られた駐在の方でした。このトラックは庄原まで帰ります、吉田までは警察官が帰りますので乗って帰りませんかと云われ神に出会ったような思いでした。垣さんと一緒に荷台に入れてもらって吉田経

由庄原へと昼間に尾引停留所で降り、いろいろと心配になりました垣さんと別れました。大変心配していた父母と涙の対面をいたしました。その後毎日三十八度以上の発熱となり、顔、胸から汁が出て、朝は目がはれあがり自分ではあけられない不安な日々が続きました。昼夜の両親の手厚い看病のお蔭と隣家の吉原の看護婦さんに薬を貰い、また、横路さんは火傷の特効薬を持って来て下さり、ケロイドが残らず直ることが出来ましたが色が黒く十六才の若者の私は、外に出て皆さんに見られるのが恥ずかしく耐えられませんでした。その後数年間はすぐ風邪をひいたように熱が出て、このまま熱が下がらず死んでしまうのではないかと不安な時期もありました。九年前脳内出血となり手術をして、その後現在迄通院しながらどうにか元気とは、言えませんが生活しています。戦争のない平和な世の中でなければなりません、生き地獄のような恐しい事は二度とあってはいけません。ほんとうに筆舌では云い表すことの出来ない体験です。

私の被爆体験記

庄原市殿垣内町　曽　根　文　子

陸軍病院山内分院の原爆被害兵の惨状を拙ない表現ながら記述してみます。

二十年八月六日

広島原爆投下で被災された方が山内駅へ

山内尋常高等小学校が陸軍病院山内分院となりました。軍服は黒こげ、着衣から出た部分は煤にくすみ、焼かれた痛み、怪我の痛みに耐えるうめきは、生き地獄とはこの事かと、目をおおいたくなりました。

分院では、取りあえず敷かれたむしろの上に横たわる被災者は、瞼も明けえず「看護婦さん水を下さい」と切ない要求をされましたが、軍医さんの云はれるのにはもう少し辛抱してもらう様にとの事で、水も上げられなかった事が今だに忘られません。

地域婦人会の介護も、食に気をつけて栄養をと我が家にあるものを持ち寄られました。

八月の酷暑に薬品はなく、手当てのすべもない有様でした。柿の葉を煎じて冷やし、傷口の汚れを拭いて上げるのが関の山でした。柿の葉にはビタミンがあるとの説で取りあえずの消毒薬の代りでした。暑い盛りです、傷口が腐る臭いがあり、傷口から蛆がわく様になりました。日が立つにつ

れ生きながらの体から蛆がわく様、ほんとうに見るに耐えられない状態でした。それからは、地域の者の努力の甲斐もなく、力尽きて死亡される方が毎日でる状態でした。昨日まで無傷と思った方でも、翌日には亡くなられていました。原爆の怖ろしさに震えました。学校裏山に作られた焼場の烟で周辺は人を焼く臭気に満ち、胸のつまる思いでただ手を合せて冥福を祈るばかりでした。二度とこのようなことがあってはなりません。世界平和をひたすら祈るばかりです。

原爆体験記

本郷町　加藤照明

広島気象台の周辺の状況

私は当時瀬戸内海に浮ぶ小島の面影を残す、江波山の山頂の東の端にある標高三十米に位置する、広島気象台に勤務して居りました。江波山には高　射砲中隊があり、山の中腹にはあの有名な江波桜の老木が一本聳えておりました。

広島には原爆投下する迄、爆弾は投下しなかったのか。

広島が最初の空襲の洗礼を受けたのは、昭和二十年三月十八日でありました。

グラマン戦闘機で海側から低空で侵入し、三菱重工業広島造船所などに機銃掃射をあびせました。また翌十九日にも艦載機編隊により、同じ様な小空襲がありました。その後暫らく空襲はなかったが、四月三十日になってB29一機が飛来し、高射砲による激しい弾幕の中を悠々と通り抜けて、爆弾十個を市街地に投下して飛び去りました。

この爆弾によって市内で初めて、死者十名の犠牲者がでたと言われております。

八月六日の広島市の状況

八月六日の朝はいつもの朝とさほど変った事はなく、午前七時には既に日射はきつく、市内で徴

用された人達と、動員学徒による建物強制疎開作業が開始されておりました。

当日も午前七時九分、ラジオは警戒警報を発令しました。その放送内容は次の通りであります。

「中国管区情報、「敵B29機広島市西北方上空を旋回中」この警戒警報は午前七時三十一分解除され、「中国管区上空には敵なし」でありました。この時の広島の上空には多少白い雲が浮かんでおりましたが、太陽の輝きは全く雲の存在など無視するかの如く、偉大な威力を示しているかの様な感じでした。私は観測室で予報官が作成された天気図を見て、今日も良い天気だから午後もB29が飛来してくるかなと思ったその時、観測室の窓硝子に一瞬目も眩ような閃光が映え、丁度写真を写す時にマグネシームを燃やす時の様な光景でありました。この時の観測室の時計は八時十五分を指示しておりました。何んであらうかと玄関口に出た突端、「ドーン」と言う音声を感じました。この間推定で約三秒〜五秒であったと思います。

爆弾が投下されてからの広島市の状況

爆弾が投下されても普通の爆弾ではないと直感し、二階に昇って、広島市一円を展望しました。驚くことに、将棋倒しの如く全壊しているではありませんか、台長室の扇は吹飛されて、庁舎至る所に硝子の破片がささっていました。幸にも台長は出張中であったので難を逃れました。再び眼を転じて市内を見渡と、横川方面から「パット」火の手が上りました。見る見る内に全域が火の海と化し、横川方面から黒い雨が降るのが見えました。

投下後、約二十分位と推定されます。巨大な「キノコ」雲が延々と広がりながら上昇して、入道

雲と変って行きました。すると間なく、「お母ちゃん、お姉ちゃん、助けて」と言う叫び声が四方八方で聞えて来ました。火と煙は上昇せず横に這い出しました。また七つの川に飛び込む姿も煙の間から見受けました。また水を頂戴と言うさけび声もあちらこちらで聞こえて来ました。こうして、三日三晩燃盛り広島の街は死の灰と化し、南は江波の小学校付近まで、東は、専売公社附近まで燃続けて来ました。私は、この痛しい惨状は今も忘れる事が出来ず永久に脳裏に残り、特に可愛い幼子が、「お母ちゃん、お姉ちゃん助けて」と叫んで天国に旅立たれました。

二十一世紀は全世界から核を絶体に取除かなければなりません。恒久平和を築上げなければならないと身を持って体験した私であります。

参考の為二、三、記述て見たいと思います。

八月六日八時十五からの気象状況を今少し詳しくみませう

気象専門語で「凪」と言って陸風と海風が静止する意味を現します。これが八時十五からの時刻に相当する為、煙も、火も上昇せずして横に這ったと思われます。

爆弾の投下目的地点はどこであったのか、恐らく中国管区司令部（畑俊六元師）であたであろうと思われますが、陸風が少し強かった為に、原爆ドーム南寄りの上空五七〇米の所で、炸裂したものと推定されます。広島気象台の技術主任の北技手は、当初黄色の光が流れて、〇・一二秒位で紫色に変り、八時十六分現には、太陽の熱で〇・五秒で赤色の火球に変った、爆心地から江波の気象台迄、三・六kmあるから、毎秒四〇〇米〜七〇〇米の爆風が来たことになると証言されております。

原子爆弾を投下した米空軍機B29エノラ・ゲイ号の航空日誌（抜粋）

同機がテニアン島で原爆を搭載して、基地を離陸したのは、八月六日午前一時四十五分（日本時間）であった、爆撃目標地、第一目標地広島、第二目標地小倉、第三目標地、長崎でどこに投下するかは、気象状況によって決められることになっていた。テニアン島から広島までの距離、約二、七四〇㎞であり、B29で片道六時半かかった。午前六時四十一分四国南方上空を北上中のエノラ・ゲイ号は、先発のB29機が観測した目標都市の、気象状況を無線で受信した。それによると、第一、第三目標は良好、第二目標は不良、午前八時九分エノラ・ゲイ号の視界に広島の街が入って来た、午前八時十五分三十秒高度九、六〇〇米の高度から、目視照準によって投下した。

同機は直ちに急旋回すると、山陰上空へ向った。四十三秒後、広島上空に閃光が発したのを目撃した。続いて二回衝撃を受け機体がグラリと傾いた、広島上空に巨大な原子雲が立ち昇っていたと言う。

日本の学術調査

現在の原爆ドームの南側寄りの上空五七〇米と推定され、炸裂と同時に空中火球が出来た。爆心直下では少なくとも六千度の照射を受けたと推定されると報告されている。

私の被爆について

山内町　土井昭二

被爆地　皆実町二丁目　広島地方専売局　昭和二十年になって、アメリカの飛行機が呉・岩国に空襲（飛行機B29から沢山の爆弾や焼夷弾を落し、建物をこわしたり、火災を起し家を焼き人を死なせたりする）が激しくなって来ましたが、広島は何時も通り過ぎていました。

八月五日の夜も空襲警報が出て夜十二時迄職場で警戒にあたり、解除になって家に帰って休み、平常通り八時に出勤して机について書類を開いたとき、何の予告なしに、青白い光がピカッと一面に光った、おかしいと思って机の下にしゃがんだと思ったらドドー、ドドーと大きい音と一緒になって窓ガラス・窓框が吹き飛んで来た、隣の人は窓框の下敷きになり助けてと手を出し、ほとんどの人が顔や体にガラスの破片が一杯にささって血を流し、書棚は倒れて、悲鳴と大丈夫かと叫ぶ声と一瞬のうちに大混乱となりました。医務室に行って見ると薬戸棚は倒れて薬はこわれている、残った赤チンキをぬって包帯をしての応急処置、窓框を取り除いて人を助けたり、また電柱が燃えたり、木造倉庫のあっち、こっちで火が燃えているのを元気な人が消して廻ったりしました。部屋の外に居た人は肌の出ている所は焼けただれ、帽子より出ている髪は焼けちぢれてなくなり、机に陽のあたっていたところの「ニス」が焼けてジューと固り、雀は羽根を焼かれて地面を歩いている、これ

は大変な強い熱光線であったと後で思いました。

この日は特に暑い日でした。川の向は火の海で全部の家が倒れて焼けている、大変な事になりました。職場の人もこれは空中爆弾だと話し合っていました。誰も自分の家の方が火の海で家族の事が心配でも近よる事も出来ず泣きながらうろうろするばかりです。

あっちこっちで火の出ていた倉庫も消火が間にあわず、鉄筋の事務所以外は全部焼けて大火事となりました。

しばらくすると御幸橋を焼けただれた人がどんどん渡って来だしました。殆ど裸に近く着ているものは全部熱風で燃えて吹き飛び、特に黒いものは全部吹き飛んで、皮膚は破れて垂れ下り黒く焼けて男女の区別もつきにくく、両手を胸より上げてぞろぞろと渡って来る。その姿はほんとうの生地獄としか言いようはありませんでした。

力のつきた人は橋の両側にばたばたと倒れてころがり、やけて汁の出た所に砂が一杯ついて細い声で、「水、水」、水をほしがる姿は何とも痛ましく目を覆いたくなる気持でした。

水を飲んで息を引取った人は数え切れません。死んだ人を運ぶ手伝をするのに、手で持ち上げようとしてもずるずるとしてなかなかさげられませんでした。

その夜も次の夜も帰る所のない人達と防空壕の中で寝ました。

大きいビル以外は殆んど倒れて焼きつくされて一面の焼野原広島が全部焼けたのです。

少しして中心地の方から白島の方へ人を探しに歩いて行きました。川のほとりや、少し水のある所

に死んだ人が黒い体を折り重なって横たわっている、焼けて皮膚がぼろぼろの人が沢山うずくまっているのが大変に痛ましく、この世の事とは思えませんでした。特に小学校の校庭でラジオ体操でもしていたのか小さな子供が並んだまま黒こげて死んでいるのがとても可愛想でたまりませんでした。

一度にこんなに沢山の人がむごい死に方をする原爆は許すことはできません。大変に悲惨な事は筆舌に尽しがたいものがあります。

また少しは元気そうに見えた人も三年、十年と後になって原爆症で白血病・癌で死んで行った人も沢山おられます。

ほんとうに原爆は恐しいものです。今は広島に落ちた原爆よりも、もっともっと大きなものが世界中に沢山あります。大変恐ろしいことです、今の世から原爆のなくなることを願ってやみません。

学徒動員

平和町　車田和江

当時私は私立日彰館高等女学校の四年生に在学中でした。昭和十九年四月に呉海軍工廠に学徒動員としてクラス二組全員一二〇名が出動させられ呉市吉浦　賀留賀の女子寮に寝起しておりました。作業する場所は呉海軍工廠火工部吉浦工場に出向いて兵器の弾丸造りをお国の為と一生懸命勢出しておりました。私とその他二人計三名は事務に廻して戴いていたのでまあまあ楽でした。呉の大空襲をまのあたり体験し連日の空襲警戒と警戒警報に恐怖を感じておりました。また毎夜のように防空壕と工場を往復しある夜の事、寮の上の方でアメリカの飛行機と日本の飛行機が空中戦をし、下からは艦砲射撃を始めた時の音が大変怖くて布団を頭から被り、あっちこっちと逃げまくりました。数回となくこの様な事にあいました。忘れもしない八月六日、前の晩は夜勤で朝食の時だったと思います。ドカンとものすごくでっかい音と共に一瞬の閃光、不気味なきのこ雲がもくもくと白、黄、赤、灰色といろんな色に変わるのが見えました。多分広島に大変な事態が起こったのではと耳にしました。十五日終戦報道を聞き（日本が戦争に負けた）皆んな大声を上げて怖さと悲しさで泣いたことを覚えています。翌日十六日学徒動員も解除となり、各々自分の荷物をリュックに詰め、手に持ったり背負ったりして河野先生、飯田先生に引率されて、私達は想い出深い吉浦の寄宿舎を

後にしました。吉浦駅を出発し広島駅へ十時頃到着、さすが噂に聞いた通り一面瓦礫と化した焼野原になっている広島を見て呆然となりました。私達は級友の吉田さんを探す為に松原町・京橋・幟町・大洲町と手分けをして数時間歩いてあちこちと探しましたが、何の手がかりもなく残念でたまりませんでした。その道中、衣服は破れ眼がつぶれた人、大火傷し皮膚が黒くなり垂れ下がっている人、目をそむきたい様な人達ばかりまた、その人達も身内の者を探し求めて歩いておられ、あまりのひどさに愕然となり震えさえとまりませんでした。夕方に近くなりクラスの人達と一緒に芸備線に乗り十日市駅で福塩線に乗り替え父母の待つ三良坂の我が家へと帰りました。この被爆体験談を後世に語り継ぐ事によって核の怖さを認識してこの地上から核兵器を廃絶する事を訴え続けなければなりません。皆さん団結して頑張りましょう。

被爆体験記

殿垣内　片岡美智

一九四五年八月六日、私達広島第三国民学校の全生徒は、雑魚場町の家屋政開工事の後片付を、暁部隊の兵士と一緒に作業をして居りました。八時過ぎ、バシウと耳も破れる様な大きな爆音、硫黄の様な臭いがして一瞬にして明るかった空が真暗になりました。私達は大きな旅館を壊すのに兵士が火薬を使われたのかと思い、「兵隊さんの馬鹿馬鹿」と何度も叫びました。

すると兵士が背中に血を流しながら「アメリカの馬鹿野郎。」と空に向って大声で叫び、次の瞬間、「明るい方へ逃げろ。」と怒鳴りました。担任の中川先生が「生徒は私に付いて来なさい」と大きな口を開けて手招をされた。その時、先生の特徴有る金色の前歯がキラリッと光ったのを覚えております。先生に離れず付いて歩き辿り着いた所は江波山でした。逃げる途中は、電車通りの電線はアメの如く垂れ下り、子どもが血まみれになった両親を大八車に乗せてどこへ行くあてもなく、泣き乍ら引っ張って行く姿は今も忘れることができません。江波では、どこから運ばれて来たのか黒焦になって半死状態の子ども（小学校三年生の名札が付けて有った。）に、トタンをかぶせてありましたが、時折ピックピックと動いておりました。親が見ればどんなにか悲しんだことでしょう。今、思い出せば腹立たしさを覚えます。江波病院では火傷した人を三ケ所に分けて、顔に赤チンキ、

白い塗り薬で治療出来る人と、黒焦げで治療のほどこしようのない人と三つに分けてありました、しばらくすると、御幸橋は何とか通れると情報が入り、何時頃か分かりませんが、中川先生がぼつぼつ帰ってみようと立ち上りました。途中左側に中国塗料が焼けて、右側は小さな道路を挟んで下は川でした。火の粉をよけるために落ちているスレート瓦を左に持って頭へかぶせて、南大橋を渡る時に橋のけたへ火がポロポロと付き始めているのに気付き一生懸命渡り、電車通りは通れないので、広島高等工業の中を通り御幸橋へ出ました。途中大きなお腹をした人が腹が丸出しで血が流れて助けを求めておられました。やっとの思いで宇品町十六丁目の我家に着きました。みんな防空壕に入って、組合中が私の帰りを待ち喜んでくれました。「同じ所にいたのに戸田おおばさんは、大火傷をしているのにあんたは火傷もなく良かったのう。」と言われてほっとした途端、首や手がチリチリとはしり出しました。見れば私も火傷をして居りました。その夜は組合中が防空壕で夜を明かしました。トラックが通っても飛行機かと何時もビクビクして居りました。いつの間にか時間が立ち終戦になりました。その時のみんなの顔は青ざめて静まりかえっておりました。私の火傷は一段と増し下痢は始り、歩かれない状態になり、そうこうしているうちに八月二十八日頃から妹が腹が痛いよと訴え、直後に魚の腹わたの様なドロドロした臭いのきついのが止めどもなく出る様になり、あばら骨が折れたよ、苦しいよ、殺してよ。楽にないよ、救急袋降ろしてや、とありったけの声を振りしぼりお母さんに頼んだ。皆のすきを見て、その袋の中から、何か光る物を布団の中に入れた。庭掃除をしていた姉がそれに気付き、あわててお母さんを呼んだ。びっくりして布団をはぐっ

て見ると、はさみと針を自分の首に当てていた。「何をしようるん。」と母が絞る様な声で取り上げた。私と同じ様に歯ぐきからは出血し、紫斑点が沢山出ていた。もう死にたいみんな元気でアメリカをやっつけてくれ、私の分まで頼む。ここに少し貯金が有るから使ってね、美っチャン（私の事）ごめんね。ああ苦しいよ、東の神様西の佛様助けて下さいと言い乍ら、夕方になりました。妹がお母ちゃん体が痛いよ。起こしてや、そしたら抱いてえやと言い、母が抱きかかえた途端、キューッと背伸びした状態で亡くなりました。これで妹の原爆病との戦いは終わりました。柱時計は六時を指していました。妹と二人枕を並べていた私は、熱がどんどん上がり、再び髪が抜け、歯ぐきからの出血が始まった。妹が生きている内に頼んでいたお医者さんが「遅くなってすみません」と言って来られました。あの当時一日給料が五円でした。一粒五円の薬を五粒飲みました。いちじくが良いとの事で姉が兄お郵便局の服を着て、長靴をはいて頭には防空頭巾をかぶり大河へ買いに行ってくれました。

当時アメリカ人が沢山日本へ来ており日本女性を見ると悪い事をするとの情報が入っていたので男装をして出ました。こうしてみんなのお蔭で一時病状が落着いておりましたが、再度同じ状態になりました。蚊帳の外では兄が、母に美智子（私）はもう助からんと言ったので皆がすすり泣いておりました。けれど私は絶対死ない。妹の分まで生きるんだと一生懸命でした。今度は親戚に灸が良いと教えてくれました。午前中が良く効くとの事で毎日十二個してもらいました。続けているうちに、やっと平熱に戻りました。やがて歩行出来るようになり十一月に学校へ行ったらみんな丸坊主状態でした。あの人もこの人も亡くなったと聞かされた。生き残ったみんなで頑張ろうと励まし合った。やがて卒業を迎え各々の道を歩き始めた。私は先生のお世話で母校の事務員で働く事になりました。田舎にあこがれていたのでふとした事から山内に来ました。直接被爆体験者の少ない田舎での生活は、精神的に非常に辛いものでした。時には心ない人のかなしい言葉をうけたこともありました。苦労の多い人生でしたが、頑張って来たお陰で、現在が有る様に思います。今はとても幸せです。命有る限り頑張るつもりです。今もテロの事件で恐しい事が起きておりますが戦争は反対です。平和な社会を願い、祈るばかりです。

当時の看護婦さんの手記

高茂町　大　下　アサコ

八月八日　庄原分院山内西病棟開設

八月八日、看護婦四名、戸坂の国民学校に収容されている被爆者を救護するため派遣され、その夜、徹夜で服務し、九日の午後、二〇〇名の患者（うち担送六〇名）を護送し、芸備線山内駅に五時過ぎに着きました。

庄原分院に疎開させていた一五〇名を山内西病棟の患者の使役に従事させます。

分院の構成は、

分院長　外科軍医大尉　藤高茂明（尾引町出身、故人）

少尉一名、下士官二名、兵隊（衛生兵）

婦長一名、看護婦一二名

山内駅には村民の方が俄か造りの担架を持ち、出迎えていて下さり、それに乗る者、肩をかりてそれにすがってやっと歩く者、自分一人で歩ける者は僅かでした。一様に衣服はずたずたで血と泥にまみれ、両耳より下は境をつけて、つる禿となっていました。（略帽をかぶっていたからだろう。）

眼は赤ンベエしたようになり、唇は上下ともまくれ上がり、人間の顔のようではありませんでした。

教室の病棟には村よりの救援物資で枕、毛布、布団等が用意されてあり、鯖（さば）を並べたごとく就寝させました。重症者を階下、軽症者を二階、その内訳は兵隊が殆どでしたが、うち看護婦生徒四〇名、地方人は数名にすぎなかった。

唇を動かして言葉を出すと痛いので口を動かさずに舌だけでものを言うので、ずらり並んでいると誰が言うのかわからない仕末でした。背中の火傷がみた眼に一番気の毒でした。始終伏臥位をとり、うなりどおしで、どの火傷もそうでしたが、この人は範囲も広いところから余計に苦しみ、火傷は化膿し、表面はカリカリに乾き、体を動かすために地図を書いたように亀裂が走り、その溝となったところを膿が流れ、カリカリの下の膿汁の部分にウジがわき、うごめいていました。また、無傷に見えても頭の表皮が緊張腫脹し、その一面に膿汁が溜まり、ピンセットで押してみるとコブコブしていて、いが栗のような髪が邪魔になって治療が困難…。

九日頃より下痢が始まり口渇を訴え発熱三九度～四〇度を越え発狂死亡と、こういうケースをたどっていきました。

軍医の方であったがやはり高熱を発し、奥さんの名を呼び続け、立ち上がって騒動するので、仕方なく荒縄で手足をしばり寝かせているところへ家族の面会があり、気の毒な思いをしたが、意識混濁のなかにも家族の情を肌で感じるのか途端におとなしくなりました。

また、ある人は頭髪・眉が日に日に抜けてつる禿となり、死期が近づくにつれて幻覚にとらわれ、

両親、妹等が面会に来たから逢いに行くといって突然に立ち上がり、隣に寝ている人をふんづけて行こうとするので、踏まれた人はこれまた奇声を発して立ち上がり、あちらこちらで騒がしくなり、救護員はなだめすかしおとなしくさせるのに一苦労でした…。

いまだ燈火管制下であったので、夜は病室も暗くしてあったため、踏まれて痛いと大声を出すと、「空襲だ!!」と騒然となり窓から飛んで出る者もいたらしく、恐怖心の深さの程も察せられるひと幕もあり、総てが対症療法で、発熱には解熱剤、下痢には下痢止め、傷にはマーキュロクリーム（赤チン）消毒して包帯、火傷には亜鉛薬オリーブ油（チンク油）の塗布、衰弱者には強心剤・強壮剤（ブドー糖、リンゲル氏液）静注皮下注入を施行し治療にあたる。以上が主なるもの、その他いろいろあり。

収容と同時に部隊名、本籍地、官等級、氏名を本人より聞き、病傷日誌を作成し、毎日死亡していく患者には衛生兵によって霊安室（工作室）に運び、間違いのないように官等級氏名を記したものを衿につけ確認していました。

そして村人の奉仕の手によって現在の慰霊碑のあるところで火葬に付していました。

また、国防婦人会より看護の奉仕も受け、毎日の副食の野菜等たくさん援助を受けました。

反対に、依頼によっては村民の方の診察もしたこともありました。

当時は各機関が麻痺し、一報（病い重し）、二報（危篤）、三報（死す）の電報を打っても間に合わず、死に目に逢えた家族はわずかであったと思います。

八十八人の犠牲者を出し、終戦後は状態によって逐次退院して行き、九月三十日閉鎖し、十月九日、われわれは広島の本部に集結する。病棟開設以来、行里の福田悟さんには扇風機を病室につけて下さり、毎日のようにお世話になった。公民館長の長島さんよりも格別の支援を賜わり、薬師寺さんには死亡者の弔いをして頂き、全村をあげて協力して頂きました。

幻覚的症状は死亡者の殆んどに現われ、肉親を恋うる心甚だしく、一見して希望の持てそうな患者でも、ああこれもまた駄目かと先を不安に思っていました。

重症者の使用した敷き布団は膿汁や汗等が底まで滲透し、骨も腐っていたほどでした。

われわれ救護班は裁縫室で、夜は交代でやすみました。病棟を閉鎖して後片づけを済ませて室内を歩くと、大変なノミで、いっぱい飛びついたり、はい上ったりするので、モンペをまくって用事をしたしまつでした。

忘れ得ぬ思い出

―被爆兵士を運んで―

山本智洋

一九四五年（昭和二十年）八月六日、広島に原子爆弾が投下されました。当時私は、山内西国民学校高等科一年生（現在の中学一年生）でした。ちょうど夏休みでしたが、学校から「八月九日午後一時までに登校せよ」との連絡があったので登校しました。

登校したのは高等科一・二年生全員でした。グランドに集合した私たちに校長先生は次のようなことを話されました。「八月六日に、広島駅付近に小さな爆弾が落とされた。そのため多くの負傷者がでて、広島の病院だけでは収容できないので、この学校の一部が仮の病院になることになった。そこで今日午後四時頃着の臨時列車で、負傷された兵隊さんが三百人くらい運ばれて来るので、諸君は、担架で駅から学校まで運んでもらうことになった。負傷しておられるので注意することと、水を欲しがられても絶対与えてはいけません」と話されました。

私たちは、六人一組で運ぶことになりました。山内駅に行って待っていると四時過ぎに兵隊さんを乗せた列車が入り、ホームに次々と負傷した兵隊さんが降りてきました。

最後に、歩くことのできない重傷の兵隊さんを、私たちは列車に入って担架に乗せたのですが、

その時の異臭と、兵隊さんが重かったことを覚えています。

自力で歩ける兵隊さん一五〇人くらいは、十メートルも歩かれると前から順番に道に座り込まれるのです。その度に、軍刀を手にした将校さんが「立て」と大声で命令されると全員がスーと立って歩かれる姿は、正に幽霊のようでした。

なぜあんなに厳しくされるのか、休ませてあげたらよいのに…と思いました。

私たちの班は、四人の兵隊さんを運びましたが、その中の一人は途中で「生徒さん学校まだか」と何回も小さな声で聞かれましたが、学校についた時には命が切れていました。

あの時の声が耳について寝つかれない日が何日か続きました。水をひどく欲しがられる兵隊さんもありました。男女の区別がつかぬほどに焼けただれた二・三人が私たちに「ありがとう」と声をかけられました。その声で、女だとわかりました。

やけどでふくれ上った人体に、ボロボロになった衣服がついているだけです。それはまるで生き地獄をみるようでした。

学校に運ばれた兵隊さんたちは、その後、地域の婦人会や女子青年団の人々によって看病されました。私たちも夏休み中でしたが、交代で登校して死体の運搬などの仕事に当たりました。学校の裏山に穴を掘って死体を焼かれました。二学期が始まり九月下旬頃まで、その焼き場で死体を焼く煙がたえませんでした。約二か月の間に八十八人の人が焼かれたのです。やがて終戦の日を迎えました。敗戦を知った兵隊さんたちの中には夜中にグランドに出て、あるものは病床で泣き叫ばれた

と、当時看病に当たっていた姉が話してくれたことや、二学期になってからも、遺骨を胸に泣きながら校門を去られる家族の痛ましい姿を見ていたことなどなど、今もはっきり記憶にあります。

生きて故郷に帰られた人も次々とこの世を去られたことでしょうし、また、五十七年を経過した今も原爆症で苦しんでおられる人もあるだろうと思います。

二度とこうした悲惨な戦争をしてはならない、こうしたことを子どもたちに語り継ぐことや、平和を守ることが大人の責務であると思いながら、五十七年目を迎えた今、私は記憶をたどりながらペンを取りました。

「はぐるま座」公演の感想

◆原爆はとてもおそろしい。また原爆を受けた人の怒りを知りました。感動する話でした。一人でよくあそこまでできるなあと思った。もっとたくさんの人がこの話を知り、同じあやまちを二度と起こさないように、まだ中一の私ですが、知っている限りのことを伝えていきたいと思います。一人芝居をしてくださったおばあさん。これからもいろんな話を聞かせてください。感動をありがとう。（中学生）

◆「その日はいつか」をみて私は、原爆があった日にはたくさんの人達が亡くなって、家族を亡くした人はかわいそうだと思います。私は被爆者のおばあちゃんから原爆はこわいものだと教えてもらったから絶対にやめてほしい。そして、一人であんなすごい芝居をしてすごくわかりやすかったです。この芝居で子供をなくすことにつらさを知りました。今の大人は子供を簡単に殺しているけど、そんなことからやめないといけないと思いました。（中学生）

◆ひとりであんな芝居をするのはとてもすごいことだと思いました。わたしは「悲しんどってもだめじゃ」と言ってお父ちゃんといっしょに働いている。というところが心に残りました。わたしは戦争のおそろしさ、苦しさを学びました。（中学生）

◆マイクも使わない為藤鈴子の演技に感心しました。一人芝居なるもの初めてみました。何を訴えているのかがよくわかりました。真にせまった動作に心を動かされました。演技一つ、観衆に教えられる場があり、効果抜群なり、孫たちへおばあさんの願いが充分に伺えました。

（退職教師、八十三歳）

◆原爆投下の様子がよく分かり、次第に薄れて行く戦争の記憶を忘れてはいけない事を再認識させられた。「その日」をみんなで作っていかなくてはと思いました。

命の大切さがよくわかりました。今若い人がしっかり受けとめてほしいと思いました。「人間少々の苦労はせにゃあいけん」物があふれている中、心の貧しさがしきりに言われる、この頃、かみしめたい言葉です。

◆大変よかったです。今まで生きるだけで精一杯だった年代が、語り継ぐ仕事をされることを心から応援しています。被爆二世としての仕事も改めて考えていかなくてはと考えます。一つ一つのメッセージをかみしめながら見させていただきました。（女性）

◆自分の小学生のころから、いろいろな映画や資料等を見て来ましたが、このような舞台は初めてで、生の声は迫力があります。言葉が難しいので子供たちに分かるかなと思いながら見ていました。原爆について知らなかった状況をたくさん知りました。

「一人でもこんな風にたくさんの心に伝えることができるものなんだな」と感心しました。うちの伯父さんも被爆者で、いろんなことを知っていますが、すべてを語ろうとはしません。自分は無力だと思いこんでいるのか、思いだすのがいやなのか。事実を知る人が少なくなりつつある今、貴重な存在だと思います。

◆昨年六月作木村で『夏の約束』を上演していただきました。今回の作品の方が小学生にはより分かりやすいと思います。「人としての行き方」を問われる部分も多く考えさせられることが多かった。これからも多くの公演が実現されればと思います。（学校事務職員）

◆有意義な公演をしていただき、感謝しています。きっと孫たちは戦争に反対し、平和の実現に努力してくれることと信じます。

◆思い出して涙が止まらなかった。孫たちはどのように感じていたのでせう。久しぶりに心に残る話でした。

◆伝えたいことをストレートに言わず、伝え切るもの、それが芸術であり、文化であると思いました。子どもたちに生の文化はできるだけ用意できる大人でありたいものです。

◆日本の将来のためにこうしたはぐるま座のような公演、原爆の詩集、孫たちへも話してやり、平和な日本を作るためにも引き続けていく必要があると思う。

◆わたしは田舎育ち。原爆投下の現場は見ていないが、あれ以後見たり聞いたりで、もうそのときの様子が脳裏に刻み込まれていたのが、日がたつにつれてなんとなく薄れてくることを思う。しかし今、はぐるま座の公演ではっきりと思い浮かんで来た。胸が詰まる思いがする。あの尊い命を奪った原爆投下いつまでも忘れてはならない。

◆原爆後の苦しみが大変よくわかりました。五十年、七十年と後にひく原爆症の苦しみに心の底から憤りに燃え、全力をあげて反対運動に協力し、平和のためにすこしでも協力していくことを誓います。

◆朗読と音楽の劇を鑑賞したのは初めてですが、広島で生まれ育った私も学校や両親から伝え聞くだけで知らない惨状がたくさんあると思います。戦争体験者が少なくなっていく今日、このような活動を続けてほしいと願っています。

◆八月六日、その日に広島に入った。戦後のために一心にはたらいた。父やおじは一言も話してく

れなかったヒロシマの話。あの火の中に消えたクラスメート達、一度でいい、元気な姿で声で会いたい。幻のクラス会も…もう父もこの世にありません。

◆五十五年前の恐ろしさがまだ癒えていないのに日々の生活の忙しさにかまけて忘れていました。平和の尊さ、大切さ、必要さを今一度感じています。今の子供達は自分中心の子供。子供だけではなく親もまったく同じです。みんなの気持ちのわかる人になることが大切です。

◆川上さんの話、本当に胸につきささる思いです。どうか孫たちが立派な人間となってくれることをお願いします。

◆私らも山内小学校で病院の軍隊さんの看護に二週間いきました。ホータイの巻きかえや食事の世話をしました。劇を見て、原爆のおそろしさ、二度とあってはならない。母親の愛情は涙の切れ目がありません。

◆原爆のひとり芝居をはじめて見ました。やさし（強い）おばあちゃんが孫への贈り物。また、私たちへの贈り物としていつまでも心に残しておきます。（四十八才、主婦）

◆はっとするほど素晴らしい歌声。いつまでも聞いていたいと思いました。詩の朗読もよかったですが言いまわしが少し難しいところもありました。平和が一番ということがわかりました。

◆原爆が落とされ、大変な状況の中で助けを求められても、どうすることもできない状況を思い出す。どうして助けなかったのかと悔いると思いますが、自分のことで精一杯だと思います。誰も責めることができません。原爆のせいです。原爆の後遺症が現在でも残っていると思います。
　すごい時代を生き抜いた人達は尊敬します。本当に体験された人には「真実」が伝わります。

◆この公演により次世に伝えていくことができることを祈っています。児童たちも静かに聞いている様子に感動し、また勇気あるこの一人芝居をみて、せめてあなた、私だけでも平和への道は努力したいものです。

◆峠三吉の原爆詩集を買って読みましたが、今日の劇を見て、また読んで見ようと思いました。朗読のすばらしさに子供達も聞き入っていたように思います。一人芝居は子供達には難しいと思っていましたが、きっと何かを感じてくれた舞台だったように思います。親子で鑑賞できてよかったです。

◆戦後誕生者が多くなる時代となり、戦争、原爆といった悪夢のような出来事を若い者たちへ継承し続けることは難しくなって来たこのときに、少年少女被爆詩集は目をつむって聞いていると涙がでるような思いでした。

◆山内地区は毎年八月六日は原爆慰霊祭を行っています。二十年来お世話をさせてもらっている一人です。迫力ある語りかけで感動しました。児童たちもいろいろ話には聞いていたと思いますが、今日は実感としてうけとめたのではないでしょうか。子供達が、息をひそめて見入り、聞き入っていたのが印象的でした。

2002年7月発行
発行　庄原市山内地区原爆被害者の会
広島県庄原市山内町813－4
山内公民館内
電話（08247）4－0451
編集　庄原市山内地区被爆体験記編集委員会
印刷　㈱ニシキプリント